□　本校研究の概要

１　本校は何を研究しているのか

一言で言えば、「生涯にわたって学び続ける強い学習意欲を育てるためにはどうするか」、つまり学習意欲の向上を目指した研究を行っています。そして、それを実現させる手立てが「ものがたり」の持つ力を活かした授業であると主張しています。

平成２７・２８年度　研究テーマ

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」

そもそも「『学ぶこと』と『生きること』をつなぐ」、とはどういうことでしょうか。

成熟した社会である現代の日本では、「学ぶこと」と「生きること」

はイコールではありません。戦後の復興期や高度成長期には、「よりよい生活」のために「よりよく学ぶ」ことは当然のことでした。ところが、社会が成熟し豊かになると、「よりよく学ぶ」ことは「よりよい生活」の条件ではなくなりました。学んでも学ばなくても、明日の生活はさほど変わらない。「学ぶこと」と「生きること」が乖離したのです。結果として「学習意欲の低下」や「学びからの逃避」といった、今日的な教育課題が生じてきます。

私たちは乖離してしまったこの「学ぶこと」と「生きること」をもう一度統合し、生涯にわたって学び続ける強い学習意欲を学校教育の中で育てたいと考えています。

2　学習意欲はどのようにして生まれるのか

どうすれば学習意欲は生まれるのでしょうか。

一般的には「分かる」「できる」ことによって学習意欲が生まれると考えられています。もちろんその通りです。どの教科でも「分からない」「できない」ままで、さらに学ぼうとする意欲など生まれようもありません。

でも、「分かる」「できる」だけで学習意欲は生まれるのでしょうか。私たちはそれでは足りないと考えています。

難関大学に合格したとたんに学びをやめてしまう大学生のことを

考えてください。彼は高校時代、すばらしい先生（または予備校の講師）に「分かる」「できる」ようにしてもらいました。どの教科を取ってもトップレベルの成績です。でも志望校に入学したらサークル活動に集中し、学習は適当になりました。これはなぜでしょう。

学習の目的が「大学入試のためによい点を取ること」であり、その目的を達してしまったからです。

さらに言えば、彼はあくまでも知識を授けられる「受け身」の存在で、「学習の主体」ではなかったのです。優れた教師によって効率的に知識を授けられ、高い能力とたゆまぬ努力でそれを身につけ、すばらしい成績を残す。しかし学習が終わればそこで全てが終わる。

また、彼は与えられた課題の答えを効率的に見いだす能力は著しく優れていますが、自ら課題を見いだし、何か新しい発見や提案をすることはできません。なぜなら、そんな非効率的なことはしたことがないからです。

しかし、もし仮に彼が「学習の主体」であったならどうでしょうか。自ら課題に向き合い、解決方法を考え、調べ、試し、失敗する。悩んで他者の意見を聞き、教師に相談し、さらに自らの学びを振り返る。それでも分からず悶々とした時間を過ごす。

そんな過程の中で、自分なりの筋道だった考えや理解に到達したとき、「なるほどそうだったのか」「やっと分かった」という腹の底

からの実感が得られるのです。これは理性的なものだけではなく、直接人間の感性に働きかけるものです。そして、だからこそ強い学習意欲につながるのです。

私たちはこの「自分なりの筋道だった考えや理解」のことを「ものがたり」と呼んでいます。当然、一人一人の「ものがたり」は違います。今までしてきた体験、今持っている能力や知識が一人一人違うからです。

このような考え方は「社会構成主義(social constructionism)」に基づいています。そして、この「社会構成主義」こそが本校の研究の最も基礎となる理論です。

3　「社会構成主義」の学力観

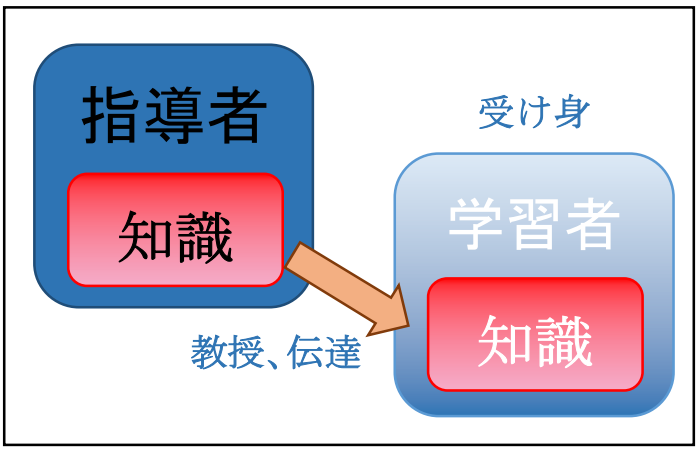
前章で「社会構成主義」こそが本校の研究の最も基礎となる理論だと述べました。では「社会構成主義」とはどのようなものなのでしょうか。本校では以下のように捉えています。

（1）知識や社会は客観的に存在しているものではない

「社会構成主義」は、一般的な「実証主義」の学習観に対比するものとして存在します。

「実証主義」の学習観とは、前章の「優秀な大学生」に象徴される学習観です。指導者が科学的で客観的な知識を、「白紙」の状態の

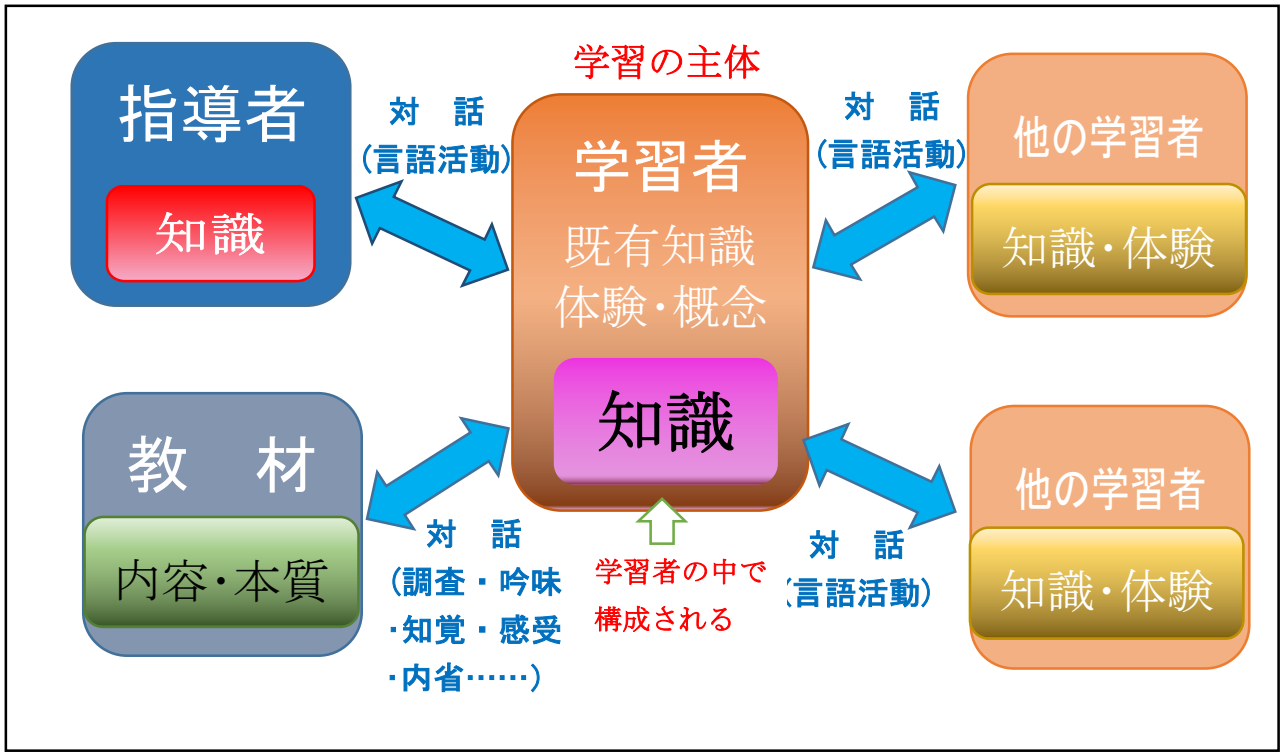
学習者に注ぎ込み蓄えていく。そこではいかに体系的に効率よく知識を習得させるかが重要となります。学習の主導権は指導者にあり、学習者はあくまでも受け身の存在です。



【実証主義的な学力観】

これに対して「社会構成主義」では、知識や現実は客観的に存在しているものではなく、人々のコミュニケーション（言語活動）によって初めて、学習者の中に構成されていくものだと考えます。

学習者は白紙の状態ではなく、既に、それぞれが学習内容に関連する既有知識や体験、素朴概念を持っています。そして教師から答



【社会構成主義による学習観】

えや解き方を教わるのではなく、自ら教材に働きかけ、課題を発見し、他者（教師、仲間）とコミュニケーションを取り、深く考える。自分の学習の過程を振り返り、他者の意見を吟味し、結果として新たな気づきに到達する。**学習者自身が学習の主体**となるのです。

つまり、「社会構成主義」の学習観に基づく授業は、必然的に「アクティブラーニング」にならざるを得ません。同時に「言語活動」なしには成り立ちません。

（２）科学的な知識についてどう考えるか

「社会構成主義」では「知識や社会は客観的に存在しているものではない」と述べました。それなら理系科目の「公式」「定理」「法則」などはどうなるのだ、と考えられるかもしれません。確かに、これらが「客観的に存在しているものではない」つまり、「一人一人が違っている」のでは、学問の意味がありません。

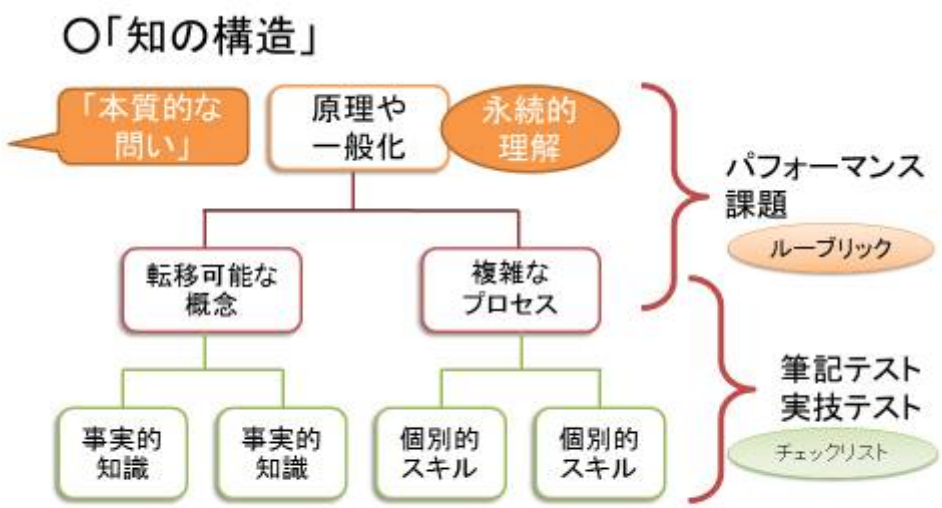
しかし、「客観的な知識を身につける筋道」についてはどうでしょうか。

既に述べたように、学習者は全く白紙で学習に臨むのではありません。学習内容に関連する既有知識や体験、素朴概念などを持っています。これは「一人一人が違って」います。このような学習者に対して、一律に客観的な知識を注入して、本当の理解が得られるの

でしょうか。

例えば電気の学習で「オームの法則」や「フレミングの法則」をただ教えるだけなら、それを使って問題を解くことはできるようになるでしょう。しかしそれは「問題を解く」だけの知識であり、「電気」そのものについての「汎用的」な知識にはなりません。断片的で、時がたてば（テストが終われば）すぐに忘れてしまいます。

ところが、適切な課題を設け、複雑なプロセスをたどる学習を行ったとすればどうでしょう。容易に解決できない課題を「一人一人違う」既有知識や体験、素朴概念を持った学習者が、互いに意見を交流させ、自分と異なる意見をすり合わせ、考えていく。それをくぐり抜け、「自分なりの筋道だった考えや理解」に到達したとき、知識は「他に転移可能」で「汎用的」なものになるのです。



文科省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 －論点整理－ 」P24より

このことは、左図に示す「論点整理」の中の、パフォーマンス課題に非常によく似ています。パフォーマンス課題は、知識や技能（スキル）を教え込むのではなく、様々な知識

やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題のことで、アクティブラーニングの一つの方法です。「ものがたり」の授業とパフォーマンス課題は、授業の表れとしては、よく似た形を取ります。ただし、大きな違いもあります。それについては別項で述べます。

ともあれ、「一人一人違っている」からこそ、「社会構成主義」の学習観に基づき「自分なりの筋道だった考えや理解」を促す授業、つまり「ものがたり」の授業が必要なのです。